６－４

主題	ALS(筋委縮性側索硬化症)利用者への対応と今後の課題
副題	利用者の「今」に寄り添って

キーワード１　利用者の気持ち	キーワード２　なし	研究(実践)期間	36 ヶ月

法 人 名	社会福祉法人　東京蒼生会
事業所名	大田区立大森本町高齢者在宅サービスセンター
発表者（職種）	庭川みゆき（主任）、岸加奈枝（相談員）
共同研究(実践)者	井上まゆみ（理学療法士（ＰＴ））

電　話	03-3764-3100	ＦＡＸ	03-3764-3102

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成９年開設の養護老人ホームが併設した通所介護施設。 法人の理念である、「お客様一人ひとりが自らのかけがえの無い人生の”今”を最大限に充実されることを支え得るサービスの創造と提供」をもとに職員一同が心のあるサービス提供に邁進している。

《１．研究(実践)前の状況と課題》

【研究前の状況】

・Á 氏　62 歳。(通所中、36 ヵ月経過　要介護度５)

車いす移動、両上肢全廃、介助にて立位可
支えれば数歩の歩行可能、他全介助。

【課題】

・徐々に低下していくＡＤＬや心の葛藤・不安な気持ちに対して家族も含めたケアの必要性の検討。

・安全のみに考慮した介助方法だと利用者の気持ちに寄り添えないことがある。

・利用者の気持ちに寄り添った介助方法の検討。

・療養の場が自宅であるため、できる人が介助するのではなく、「誰でも」できる介助方法を見つける。

・唯一の外出の機会であり、可能な限り通所を続けてもらうために関係者を含めた信頼関係の構築。

《２．研究(実践)の目的ならびに仮説》

氏の希望と気持ちを尊重し、安全確保を考慮した上で通所が続けられること。

【期待する成果・目的】

・本人の気分転換に繋げる。

・家族の休養

・安心・安全な介助。

・職員間で検討を重ね、よりの気持ちに寄り添った支援を目指す。

進行停止や身体状況の改善を期待するのではなく、法人理念にある”今”を最大限に充実させるケアの実施。

無断転載・複製を禁じます。

《3．具体的な取り組みの内容》

＜誰でもできる介助の検討＞

ＰＴと共に職員誰でもできる介助方法を検討。都度、利用者、家族(ケアマネージャー　以下 CM)の意向を聴取し検討。

その日の体調等によっても立位等の変化があるため、介助に入った職員が気づいたことを担当へ報告し全体で共有する。

利用者の自分でできることを継続したい気持ちと利用者の能力を生かし、ＰＴと共に介助方法をＡＤＬの変化のたびに変更、検討を繰り返す。

＜気持ちに寄り添うために＞

ＡＤＬの低下により、葛藤による苛立ち等が見られてきた。

① 声掛けを多くし職員とゆっくり話せる時間を作り、傾聴を基本に時間をかけ話が聞けるように配慮した。
② 訓練も状態確認のための個別訓練を PT が実施。
③ 一対一で対応できる体制を作り安心・安全に過ごしてもらえるよう配慮する。
④ 本人の気持ちの変化や要望等、変化のある都度は家族、ＣＭへ伝え、情報を共有する

《4．取り組みの結果》

家族はもとより利用者と強い信頼関係が結ばれ現在も通所を続けている。自立支援に向けてのサービス提供とは異なり、その人の”今”を大切に生きるとは何か、その重要性に気が付かされるケースであり、今後も引き続き可能な限り通所が継続されるよう、利用者、家族と共に努めていきたい。

《5．考察、まとめ》

身体介護の基本である、個別性の尊重、自己決定の尊重を軸にありのままの姿を受け入れ職員が一丸となって、サービスを提供してきた。

病状の変化への気付き、できるサービスの限界を明確にし、安全かつ気持ちに寄り添ったサービスとは何かを改めて、職員が考え、包括的に学ぶ機会が与えられた。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

ここから始める介護　大瀧厚子著　看護出版

《8．提案と発信》

施設として、在宅で生活できている人は、いかなる疾病、状態であっても一切断らず、受け入れる姿勢でなくてはならない。今回のケースを通してより受け入れる幅が広がり、地域に密着したデイサービスセンターとして、様々な利用者に目を向け、利用しやすい施設として地域に発信していきたい。

無断転載・複製を禁じます。